

史料室だより
第3号
1982・7・21

特集・一年半の成長

編集 田辺 真人

発行 神戸・深江会館

生活文化史料室

〒658 神戸市東灘区深江本町3-15-17
電話 神戸(078) 41110475

町かど歴史博物館の五百日

県立御影高校教諭
生活文化史料室長

田辺 真人

神戸市の東南端の深江財産区から、旧深江の村誌編さんを依頼されたのは、昭和五十五年の春だった。

ここは、本庄小学校庭の弥生式土器の出土や、北方の森の銅鐸などが、古くから開けた農耕社会を教えてくれる。古代土地制度・条里制も旧字名や深江駅の西の高橋川の川筋に残っており、学校名などになっっている本庄も、東の葦屋庄や西の山路庄とならぶ荘園の名残りである。室町時代の農民たちは、そこに生活を守るためいくつかの村を作った。江戸時代には近在の村々は、尼崎藩の支配を受け、幕府直轄の村もあった。

明治維新ののち、市町村制の実施で、深江は西方の青木村と西青木村と共に一行政村を形成し、中世の荘園名にちなんで、本庄村と称した。その後、本庄村は阪神電車の開通などで大阪・神戸と直結され、半農半漁の農村は、阪神間の住宅地として発展し、海辺には高等商船(現商船大学)も建てられた。

昭和二十五年、この本庄村は賛否の激論の末に、西から伸びてきた神戸市と合併し、御影町・住吉村・

魚崎町・本山村とともに東灘区を誕生させた。

このような永い歴史がありながら、逆に阪神大水害や第二次大戦中の空襲、たび重なる台風時の高潮によって、この地の史料は懐滅的状况である。そこで私は、財産区に対して、昔のことを教えてくれる資料の収集を逆にお願したのであった。

役員諸氏を中心に財産区で、資料集めが始まった矢先、深江で六代も医師を継いでこられた深山健二家から、明治八年建築の旧邸改築に伴う民具類の一括寄贈が申し出られた。民具調査を共にしてきた渡部永子さんと、現・友の会幹事の寺岡一雄氏らと邸内に入り調査を始めて、私たちは資料の豊かさに啞然とした。そのうち、資料整理に来て下さった財産区の太田垣正雄会長や委員の志井正夫氏らと、ほこりにまみれたあとの休けいの時、雑談が始まった。「先生そろそろ要る物を選んでください。史誌の資料になるものももらって、あとは廃棄にしますので」

「……………」
「どのくらい要るでしょうか……………」

「……………」全部、みんな要ります」

「全部いわれても、置くところもないし……………」
地方史を勉強している者にとって、地域の歴史の展示館は終生の夢であろう。まだ若い私にとって、莫然としていたその夢のイメージが、急に具体的に頭に浮かびあがってきた。これらの民具が、今手放すと再入手が困難なこと、貴重な祖先の生活文化の遺産であることを、やがて財産区では深く理解して下さった。鎮守の境内の一面に、プレハブの倉庫を建てる計画があったのを、コンクリート二階建にして二階を史料室にということになった。

報道関係の方々のご協力で、土地の人々の理解は一層深まり、市・区関係者からは惜しみないご協力を賜わった。私のよき理解者である小嶋悦郎氏や門前喜康氏は財産区の志井保治氏を中心とする深江の有志の方々とともに、史料室の支えである友の会を誕生させて下さった。本来の目的だった史誌の編さんに関しては、財産区の岡田龍太郎氏や松尾福夫氏が推進役となり、史料室の管理は、隣接する深江会館長の中尾久一氏に負うところが大きい。そして、資料も、先述の深山家ほか二十名以上の方々から、合計二千点が寄せられた。見学者も千七百名。

順調すぎるこの一年半の歩みには開室日である土曜日日に受付を勤めてくれる若者たち一かかつて私の授業を聴いてくれた人たちのかけがえない支えも忘れてはならない。

ひょうたんから出た駒のような、この史料室の五百日の歩みを支えて下さったこれらの人々に、深謝しつつ、今後のご協力をお願いする今日、比の頃である。

生活の歴史のミニ博物館

長岡 暎子

阪神電車深江駅前（ふかえかいかい）の深江会館（ふかえかいかい）の北にある別館・生活文化史料室（せいかくわしりょうしつ）は、わたしたちの小さな歴史博物館（れきしむくろく）です。深江村のこれまでの歴史について、本を書いていく間に集まった身のまわりの史料を整理して、みなさんに見ていただくために、深江地区の人々がつくっている財産区という団体によって建てられました。

この土地で古くからお医者さんをしていらつしやる深山さんや、その他多くの人たちがくださった約二千点の生活用具、史料（食器・おもちゃ・きもの・お祭りに使う道具・お医者さんが使う器具・武器・古い記録・むかしの新聞・本など）があります。これらは、深江を中心とした地域社会の歴史や生活のあゆみを知るための大切な遺産です。史料室では、これらの史料を小さな部屋の中で次々にお見せします。

史料室では、史料の展示のほか、歴史の本を作ったり見学会やお話を聞く会などを計画しています。ぜひ、お友だちやお父さん、お母さんたちといっしょに見に来てください。

史料室をたずねてみると：

みなさんは、おじいさん、おばあさんやご両親の小さいころの思い出話を聞いたことがあるでしょう。そしてそのお話は、みなさんの生活とはずいぶんちがってはいませんか。みなさんがお話の中でしか知

らないむかしの生活のようすを自分の目で見てみたいとは思いませんか。

まい日みなさんが学校で使っている教科書とむかしの教科書とはどのようにちがっているでしょうか。たとえばみなさんの音楽の教科書には、音階が「ド・レ・ミ……」で書かれていますが、大正時代のハ・モニカの楽譜には「ド・レ・ミ……」の代わりに「1・2・3……」と書かれています。文房具では、色えんぴつや絵の具やコンパスがあります。なかでも絵の具は、今使われているチューブ入りとはちがつてパレット式になっているのです。

また、みなさんがもっと小さかったころによく遊んだままごとの道具はどうでしょう。みなさんが使ったのは色とりどりのプラスチックでできた茶わんやコップだったでしょう。けれどもみなさんのご両親が幼なかつたころには、ほんとうの食器をそのまま小さくしたような陶器やガラスのままごと道具で遊んだのです。

そして、ままごと道具が今とむかしではちがつているように、ほんものの食器類にもずいぶんちがいがみられます。うるしぬりや、重箱を小さくしたような箱をいくつか組み合わせた行楽用の弁当箱は、さいきんでは見られないめずらしいものです。またむかしは、おさらの絵もすべて手でかいていたので、同じおさらでもそれぞれ少しずつ絵がちがっていた



りします。みなさんがよく知っている阪神打出駅の近くで作られていた打出焼もありません。けれど、打出焼を作る窯の方はもう今では残っていません。さらに、あまり電灯が使われていなかったころ、夜道を歩くのに使ったちようちは、夜の往診をしなければならぬこともあるお医者さんにはかせないものだったようです。ちようちは、やがて懐中電灯へと変わっていくのですが、初期の懐中電灯は箱型で今のものよりかなり大きなものでした。これらが暗やみを明るくするためのものであったのに対して、夜、家のあかりが外にもれないようにするための防空用電灯カバーがあります。戦争中、夜になると家からもれた光をめぐけて爆弾を落したからです。

ここにあげたものは、史料室にある物のほんの一部です。ほかにお医者さんが治療に使う器具、ひな人形、武者人形、こいのぼり、ちく音機、レコード、よろいかぶと、火なわじゆう、だつこくをする千歯こき、こく物をより分けるとうみ、牛のくら、花よめ衣しよう、むかしの新聞などがあります。そして、みなさんが史料室で歴史の勉強ができるように、図鑑や本も少しばかりそろえています。

新しい高校学習指導要領の中では、あらためて生徒たちの生活の場である「地域社会の歴史と文化」が日本史教育の一単位として取上げられ、また生徒の歴史的思考力の深化のための主題学習に「衣食住・年中行事・冠婚葬祭・生産用具など」の生活文化の展開を社会との関連において学習できるようにとの観点で述べられている。史学科の大学生であった頃、私は、子供会の世話をしていた友人からある依頼をうけて困ったことがあった。

それは、夏休みに小学生たちと身のまわりの地域の昔の姿を調べたが、よくわからないのでその歴史を教えてほしいということだった。当時、西洋史を学んでいた私は、ほとんどそれに答えることができなかった。その土地は私もよく知っている所だし、高校時代から日本史の勉強はしていたはずだったが、同様の感想をよく聞くことがある。この時から私は、歴史は単に過去の事象についての物知りで終らず、温故知新を旨とすべきだといわれるが、同時に地理的・社会的にも速きをたずねて近きを知ろうとする努力を怠るはならないと痛感するようになった。

二
このような経験から、教壇生活

に入ってから私は、日本史の授業の中に地方史研究の成果や民俗調査の收穫を生かそうとしてきた。例えば、考古学的な時代には、校区域を中心とした遺跡の分布を示し、各遺跡からの出土品をあげて、われわれの周囲で生きた各時代の祖先たちの生活文化の展開を考えさせている。古代・中世に関しては、校区を中心とした史料のプリントを配布して、授業の中で適宜の傍の資料集に追加して利用している。

先生がたに

農村の生活と六甲山系の雨乞い

「地域社会の歴史と文化」教材さがしから

ふりをして、正月の供え物をもたらって食べたのであったが現在にはただ口々に、カアカアカア 山の神のさいでん棒と唱えつつ、水車納屋などを巡って米をもらい集め、自分で団子をこしらえて鳥塚に供えに行くことになっている……」

足の夏に彼らが雨乞いをした信仰の場が六甲山中に数カ所残っている。芦屋川流域では急峻なV字谷の上流に巨岩の集まった場所があり、その中の少し高みにある弁天岩は水神の住居とされていた。人々はこの岩の前で降雨を祈った。何日祈っても効果のない時、彼らは一旦山をおり大きな蟻(ふか)を捕えてやつてきた。弁天岩の眼下に弁天滝という滝があつて、その水の落ち口に上面の平坦なフカ切り岩とかマナイタ岩とよぶ巨岩があるが、この上で彼らは蟻を切

三

現代の生活文化に密接に關係する近世の農村生活を取り上げる授業では、生活の中から生じた切実な欲求の反映である民間信仰を通じて、当時の生活史の具体的な姿と現代への展開を考えさせている。江戸時代の東神戸から芦屋―広義の灘地方―の農村生活は信仰と結びつけて学習させている。

「少年たちが鳥の啼き声をまねて、祭りの神供をもらいに来る風もある。兵庫県蘆屋の鳥塚もその一例で……もとは小児が鳥の身

の上に祀られていたこと。③この神事に際して供物の団子を作る米を子供たちが水車場へもらいに行つたことから当時、水車業が盛んであったこと。などを知らせる。

の刻み、弁天岩まで運んでそれを岩に役つけた。すると、聖域を汚された水神が血潮を洗いおとそうと雨を降らせるのだという。天保5年に95日の日照のすえに、この行事が行われた記録がある。

また六甲山頂近くの峰の上に、石室殿という大きな石祠がある。慶長18年建立の銘があるが、この峰が多くの中小河川の分水嶺であるため、これも雨乞いがさかんであった。早魃の時、ある村はこの祠の前で雨を祈っておこもりをするが、降雨がなければ、谷川で沢

ついては、芦屋市の委嘱として収集してきた古い農具類やその調査でみつかった江戸後期の「農事次第の図屏風」の各場面とを使って知らせることができる。

(3)ところで六甲南麓の平地は、瀬戸内式気候で大河もなく、水の入手は農民の死活問題だった。水不

若者が土樋を粉々に破壊した。6月に芦屋側は大坂奉行所に破壊行為を訴えた。一方、住吉川も不法な取水を訴えて反論。約半年の後決して住吉川から引水はしない。ただこの年の破壊行為については住吉側から銀五貫の賠償を芦屋側

に支払うこと。芦屋・打出はこれを基金にして瑞池を築いて今後の水不足に備えるように、ということだった。この時から、その時にドビワリの地名がついた。

(5)このような努力の末、秋の收穫の後に村の鎮守の祭りをして感謝の祈りをささげた。農民たちがその時、歌舞伎を演じた農村舞台も神戸市の新市域には数多く現存している。

以上のような資料が生徒と共に調査してわかったが、これらを教材として、近世の村名・村方三役や村落支配のしくみ・裁判の方法などを具体的に学ばすことができるし、農業技術や季節ごとの作業過程、そして祖先たちの願いにもふれることができる。これらの史

実や生活文化財が急速に消滅しようとしている現在、私たちがそれを調査・収集することから始め、整理・分類して教材化することも、一方では広く社会的にもその成果を展示・公開できればと思う。

一九八〇年七月二十八日、東京の国立教育会館で開かれた全国歴史教育研究協議会第二十一回研究大会での「民間信仰と生活文化」部会における発表要旨で、同会の研究紀要に発表したものを転載しました。

付記

田辺 真人

南西へ流れている。そこで彼らはこの時に土樋(ドビ・土管)を通して住吉川の水を芦屋川へ流し取ろうとした。その後まもなく住吉下流の村々(現神戸市内)の村民がこの工事あとを見つて、怒った

四
以上の様な資料が生徒と共に調査してわかったが、これらを教材として、近世の村名・村方三役や村落支配のしくみ・裁判の方法などを具体的に学ばすことができるし、農業技術や季節ごとの作業過程、そして祖先たちの願いにもふれることができる。これらの史

実や生活文化財が急速に消滅しようとしている現在、私たちがそれを調査・収集することから始め、整理・分類して教材化することも、一方では広く社会的にもその成果を展示・公開できればと思う。

一九八〇年七月二十八日、東京の国立教育会館で開かれた全国歴史教育研究協議会第二十一回研究大会での「民間信仰と生活文化」部会における発表要旨で、同会の研究紀要に発表したものを転載しました。

付記

田辺 真人

好評のミニ博物館

神戸 深江会館生活文化史料室

入館者、千人超す 1周年 歴史教室も計画

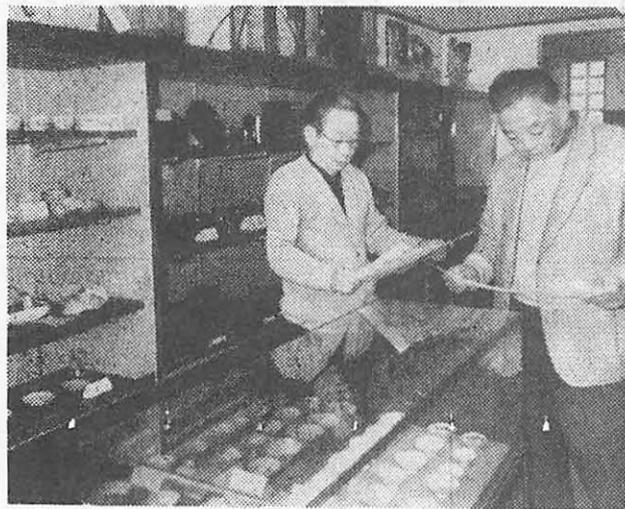
昨年二月、地域の人たちの手で、神戸市東灘区深江本町三に作られた町の民俗史料館「神戸深江会館生活文化史料室」が開設一周年を迎え、二十一日午後一時半か

ら深江会館で記念の会が開かれた。史料館の入館者はこの一年間に千人を超え、展示史料も二千点に増えるなど好評。参加者らは講演や映画で『ミニ歴史博物館』の順調なすべり出しを喜び合った。

深江地区は旧武庫郡本庄村で、五十年ごろから住民の間で旧村の歴史を残すため「深江史誌」を発刊しようとの声が出て、深江財産区管理会が住民に史料提出の協力を呼びかけたところ、江戸時代中期から昭和前期までの民具、史料など約千三百点が寄せられた。

神戸史学会会員で県立御影高校教諭、田辺真人さん(史)が史料の収集、整理に当たり、財界区管理会、これらの生活文化史の遺産を一帯に集めて展示し、住民らに見てもらおうと、深江会館北側に鉄筋二階建て延べ八〇平方メートルの別館を建設。昨年二月二十一日に、町の人たちの手で作られた神戸市内でも初めての『ミニ博物館』としてオープンした。

史料室には、江戸時代末期から明治時代にかけての種痘の免状やカルテなど貴重な医学関係の古文書、近世の合戦に使われたかぶとや火繩銃、地元の打出焼の陶磁器類、大正期の子供のおもちゃ、クワ、スキなどの農具などを展示している。



開設1周年を迎えた町の『ミニ歴史博物館』(神戸・東灘区)

史料室の開館は毎週土、日曜日だが、オープン以来、一年間の入館者は千二百人。地元の小、中学生や先生、婦人会のお母さん、老人会のお年寄りのほか、大阪府吹田市や姫路市内などから見学に訪れた人もいる。社会科の勉強に団体で訪れた小学生も多い。

また、見学者から、この一年間に明治時代の小学校の教科書、通信簿や歴史書、古本、農具など五百点が寄せられたほか、地元の人などから合わせて計七百点が寄贈され、展示物は約二千点に増えた。このため、展示室が手狭になり、増設の話も出るほど。

この日の記念の会には、約百人が出席、田辺教諭(史料室長)の講演「神戸の歴史と伝説」を聴いたあと、五十年前の布引、新開地などを撮影した昭和初期製の映画「観光の神戸」を鑑賞。史料室を全員で見学した。

田辺教諭は「地区の人たちに支えられて順調なスタートを切ることでできた。史料室をさらに充実させたい。今夏には小学生を対象に歴史教室も計画している」と話している。

神戸華僑歴史博物館 (館長 陳 徳仁)

9時~17時 (年中無休)
 大人 300円 学生 200円 (10人以上団体割引有)
 国鉄元町駅 西口から南へ5分の海岸通角
 〒650 神戸市中央区海岸通3丁目東南角KCCビル2階
 ☎ (078) 331-1277

昭和57年(1982年)3月3日

①	サ	ン
0	0	0
1	0	0
2	0	0

新り抜ける「女が命を懸けたとき」近藤田原 在摩藤和原雅子 志願太郎(55歳)
 0 年頃のあなたに「おもひが村の」昔。を語るミニ博物館好評(30歳が関)物館開館
 0 長崎史料報「ワンスアガル」大は船旅札」萬屋錦之介さんちかひある目的家集

東灘・ミニ郷土博物館

笑顔で解説

芦屋の赤松さんと小野山さん

「よう分かる」と人気

一方の小野山さんも県立芦屋
高出身で、武庫川女子大学文
学部の教育学科4回生。おっと
と、神戸松蔭女子学院大学では
国文学を専攻、去年卒業するま
で西鶴の俳諧を勉強した。徹
底的な古典志向派。たぞうだ。
和子さん

神戸・東灘の深江会館生活文
化史料室で、芦屋キヤル二人が
案内役をつとめ、入場者の人気
を集めている。芦屋市三条町の
赤松豊子さん(三)、同貝川町の
小野山和子さん(三)のコンビ。
史料室オープン以来一年、明る
く親切な受け付けと案内ぶり
いまや欠かせない存在になっ
た。



赤松さんは飾らない、さっぱりした性格。県立芦屋高校時代は落語研究会「帯の会」のメン

私たちに
ピッタリ

「ここは、いわば庶民のミニ郷土博物館。民話の収集などの仕事ができたらなあと、受付けを志望したんです」と、赤松さん。古いものに魅か

りした優しさが漂う。歴史が好きて、卒論は、「兵庫県下の農村舞台」。茶道や謡曲も習っている。

この史料室の展示品は、旧深江村に残っていた大正時代の人形、おもちゃ、食器から、20年前の打出焼の小鉢まで身近な生活用品が千300余。

赤松さんらは、入館者一人ひとりに丹念に解説。地元のお年寄りや小学生たちには、分かりやすいようにと面白く話を味つけする。親切で、興味を湧かせる話しぶりは、なかなか流暢で、テンポがある。

ま、開館一周年を記念する講演会、それに会報(2号)の発行に追われている。

- 生活文化史料室友の会・新入会の方々
- 市原 聡美 森岩 栄子 中西 令子 上田 絹代 三枝 照於 納多 春穂 植松 昌子 高木 正皓 藤井 政邦 岩本 達也 田村 美里
 - 谷口美登里 横谷 純子 藤井 善年 長岡 暁子 村原 晴夫 増田 春吉 岩本 重治 土井 稔 薩谷 武夫 田中 諄子 門田 頼明
 - 小林 知宏 西川 敏弘 川嶋 暁 奥田 幸子 西田 貞二 原 知々夫 松田 俊治 宮脇 健二 東田 純一 久保 梅子 竹田賢太郎 金田 吉永 松原 末吉
 - 寺田 福枝 中島 房子 加茂 幸光 丸岡増次郎 多田万次郎 道広 喜作 藤井 愛子 柳田 邦男 上田 倫久 新入会五十四名 (会員合計百七十三名)

入会のおすすぬ 神戸史学会

機関誌『歴史と神戸』(隔月刊)
会費・年額 2,000円(1~12月分前納)
〒653 神戸市長田区川西通3丁目8
太陽印刷内 ☎(078) 691-2085
振替口座 神戸4018

井上郷土玩具館 (館長 井上重義)

10時~17時 毎週水曜休館
(祝日は開館・翌日休館)
姫路駅から⇒国鉄播但線で23分の香呂駅下車
東へ徒歩10分。
〒697-21 兵庫県神崎郡香直町中仁野671-3
☎(07933) 2-4388

史料室所蔵の陶磁器について

広岡 俊 二

日本の焼物は、世界最古といわれる縄文式土器から出発し、約一万年を経た今日、世界に冠たる「やきもの国」として、人々から注目を集めています。

焼物は、土器、磁器、陶器、磁器と呼ばれる、それぞれの特色をもった、趣きの異なったものに大別されており、焼物ファンはもちろんのこと、見る者に種々の感動を与えてくれます。

その中でも特に技術的水準が高いとされる磁器は、焼物の王様として隣国中国において発明され、日本では、その技術は、十五世紀末から十六世紀初めに有名な秀吉の朝鮮戦役後に、北九州肥前有田地方に伝わり、俗に言う伊万里焼として名声を博しております。

生活文化史料室には、生活文化の一端を示してくれる焼物群が多く展示され、玩具類とあわせて、我々の先祖の人達の生活をしのばせてくれますし、現に、使用した経験のある方には、よき思い出として見ることが出来ます。

私は常々、焼物というものは生活の臭いがするものでなくてはならないと考えております。

それぞれの器(うつわ)には、そのものを制作した人々があり、その目的、用途によって、手に触れ流通してきたという歴史があります。

最近では、焼物と申しますと、茶道の発達により

觀賞用としての価値がうんぬんされ、その方面での研究、興味は尽きないと思われれますが、日常用器として作られた焼物に目を向けることも、非常に大切なことだと考えています。

現代は管理社会といわれ、つい目前の利益追求のため、自己を失い、組織人として行動しがちですがふと、何気なく見つめる、それぞれの焼物の中に、心の余裕を見いだして、ほくそえんだりすることも時には必要かと思われれます。

二

江戸時代の初め、北九州、肥前の山の中で作られた伊万里焼(有田焼とも言ふ)は、その丈夫さ、色つやのよさでもって、たちまち日本中に広まり、多くの需要家達が先を競って買い求めたものです。

時には農村の地主達、町家の主人達、又川舟の舟頭達など……。

ただここで言っておかねばならないことは、これらの雑器は、今日見られる様に 日常生活の中で使用されてきたものですが、蔵の中にしまわれ、晴(はれ)のうつわとして存在したものもあり、今の感覚では少し異なった見方をした方がよい場合もあります。

日本文化史(生活史)の中に果たしてきたこれらの雑器に触れることによって、我々の祖先が作りあげてきた多様な工芸技術の一端に触れる喜びをもつことも大きなことです。

三

当史料室に展示してある陶磁器は大別して、江戸期と、明治以降に分類して考えることが出来ます。



まず江戸期ですが、伊万里焼系磁器と考えられる小皿類が三種、めし碗類が、菓子碗一種を含めて四種、そば猪口が二種、色絵の向付けが二種、よろけ縞文の湯のみ一種、計十二種を数えます。

明治以降になりますと、プリント模様を施した湯のみ茶碗三種、皿(鳳凰文)一種、色絵手塩皿二種、日清、日露戦役の凱旋、退營記念酒盃が十種程、地元、本庄小学校開校記念の徳利二種、等々が見られます。

その他、今回の調査では不明な点も多く、報告できないものとして、燈明皿に使用されたと思われる素焼の皿が三点、湯のみ三点等があります。

又、明治末から昭和初めにかけて使用されたと考えられる、色とりどりの興味あるおもちや類、地元の出出焼なども、これからの問題として残されています。

(県立東灘高等学校教諭)

史料室友の会のあゆみと展望

友の会会長 小嶋悦廊

昨年二月史料室開設と同時に友の会が組織され、多忙な中にも会員の御協力のお蔭で無事一年半を過ぎ、ご事ができましたので、これを機会に友の会のあゆみを振り返り、今後の計画をお知らせします。

五六年

二・二一(土) 生活文化史料室開室の日、夕刻神戸
深江会館生活文化史料室友の会発足、会員数約五〇名。



見学ツアー「灘の酒蔵を歩こう」
(昭和56年4月12日沢の鶴資料館)

四・一二(日) 第一回見学会「灘の酒蔵を歩こう」
半日ツアー・神戸市灘区一帯、沢の鶴資料館見学。

八・一五(土)、一六(日) 第二回見学会「南蛮美術と摩耶山からの夜景を楽しもう」一泊旅行・摩耶山天上寺に宿泊。閉館ちかい南蛮美術館見学。

十・一七(土) 第三回見学会「郷土芸能の夕べ」無形文化財ザンザカ踊り。鑑賞・芦屋市ルナホール。

十二・六(日) 第四回見学会「神戸の史跡を二階建てバスで」ツアー。市内の歴史の跡、北野町や考古館を訪ね、ポートアイランド北公園から夜景。

五七年

二・二一(日) 一周年記念・深江会館二階ホール。

第一部 歴史の講演と映画の集い
講演「東神戸の歴史と伝説」・田辺真人氏。

映画「観光の神戸」・門前喜康氏。

第二部 友の会第一回総会・立食パーティー・約八〇名参加。一周年の日で、会員数約一五〇名。

五・九(日) 第五回見学会「須磨の歴史散歩」。

以上のように二、三ヶ月に一回の割で郷土の歴史講演会や見学会、バス旅行などを企画し、その都好評裡に文化行事をこなしてまいりました。これらの行事が身近な歴史にじかに接し、郷土に愛着を抱き、生活文化を大切に後世に伝えていく心が芽生えるきっかけになればと願っています。また会員の方には昨年は無料で「東灘歴史散歩」「市民のグラフこうべー住吉川」等が配本されたほか「史料室だより」(創刊号、第二号)「友の会だより」(創刊号、第四号)を通じて種々の刊行物の紹介や会員の声もお知らせしてまいりました。更に友の会会員名簿も出来上がり、一層組織として充実してまいりました。

この実績を踏まえ、二年目の第二以降は次のような計画を立てています。

七・二五(日) 野外映画の夕べ「ポートピア81記録」

「まんが日本昔ばなし」「石とくらし」など。

八・二九(日) 神戸港めぐり船の旅

十・十(日) 魚をかついで近世六甲越えの交通路・魚屋道を歩き、有馬温泉で汗を流す会

その他、秋には芦屋ルナホールにて「郷土芸能の夕べ」、冬には田辺真人氏による「シルクロードの旅報告会」等も随時組み入れる予定です。また、会員の方には身近な土地の歴史を語る何冊かの書籍を配本する予定にしています。

手狭なミニ博物館も新聞・テレビ等の報道もあって約一七〇〇名の来室者があり、増築計画も具体的に話されるようになってきましたので友の会も一層会員を増やし、安定した有意義な友の会にしていきたいと思つています。今年には会員数二〇〇名を目標にしていますので、どうかお知り合いの方々にお声をかけて頂きますよう、この紙面をお借りしてお願い申し上げます。今後ともよろしく御支援お願い致します。

(県立舞子高等学校教諭)

友の会会員募集中

お問い合わせは史料室員まで

